慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「信頼」(Creditability)取引の哲学：日本人の経済取引に内在するもの(関口操教授退任記念号)
Sub Title	The Philosophy of "Creditability" Transaction(In Honour of Professor Misao Sekiguchi)
Author	清水, 龍瑩(Shimizu, Ryuei)
Publisher	
Publication year	1991
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.34, No.1 (1991. 4) ,p.5- 28
JaLC DOI	
Abstract	Creditability取引は,1回1回の取引で利益はでなくてもいい,信頼できる多角的な複数の相手と,細かなルールを決めずに取引し,長期的,全体的にみて利益がでればいいという考え方である。日本の"今回は泣いてくれ"という取引に典型的にあらわれる。この考えは,強力な武士階層が支配し平和が続いた江戸時代に定着した。平和が続いたため武士と君主との間に実質的な価値のある取引ができなくなり,儒教の中の君臣倫理,共同体倫理などの抽象的価値だけがとり出され,滅私奉公の精神が強調された。これが,支配階層の価値観にすり合せようとする日本の商人の集団性,協調性の価値観のもととなった。利より義を重んずる家訓・価値観が拡がった。しかし現実には大名貸,株仲闇取引で実質的な利は確得していた。一方西欧では,人生は闘争であり,そこではカルヴァン派の,神にのみ責任をもつが神にも頼れないというの考えができ上り,そこからの価値観ができ,商人の間に資本主義精神が育った。現在,儒教で資本主義のアジア圏の国々の経済成長はめざましい。そのうちでも日本のCreditability取引は,系列企業システムなどによって高い生産効率をあげ,その効用が宣伝されている。しかし日本企業がグローバル化する現在,闘争を前提とする価値観をもった異った国の人々と取引をせざるをえず,平和・協調の価値観のCreditability取引はできなくなる。さらに日本国内のCreditability社会の中では,細かいルールがないため過度の強者が現れると富の配分が大きく偏り,人々の不満がCreditability社会を支えている政治的枠組自体をこわす可能性もでてきた。ここで過度の強者がでないように,意思決定者の深い洞察力と大きな道義感の必要性が強調されるようになってきた。
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19910425-04056026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
34 巻 1 号
1991 年 4 月

「信頼」(Creditability) 取引の哲学

——日本人の経済取引に内在するもの——

清 水 龍 瑩

<要旨>
Creditability 取引は，1回1回の取引で利益はでなくてもいい，信頼できる多角的な複数の相手と，細かなルールを決めずに取引し，長期的，全体的にみて利益がでればいいという考え方である。日本の“今回は泣いてくれ”という取引に典型的にあらわれる。この考えは，強力な武士階層が支配し平和が続いた江戸時代に定着した。平和が続いたため武士と君主との間に実質的な価値のある取引ができなくなり，儒教の中の君臣倫理，共同体倫理などの抽象的価値だけがとり出され，滅私奉公の精神が強調された。これが，支配階層の価値観にすり合せようとする日本の商人の集団性，協調性の価値観のもととなった。利より義を重んずる家訓・価値観が拡がった。しかし現実には大名貸，株仲間取引で実質的な利は確得していた。一方西欧では，人生は闘争であり，そこではカルヴァン派の，神にのみ責任をもつが神にも頼れないという<内面的孤独化>の考えができ上り，そこから<禁欲的職業労働>の価値観ができ，商人の間に資本主義精神が育った。現在，儒教で資本主義のアジア圏の国々の経済成長はめざましい。そのうちでも日本の Creditability 取引は，系列企業システムなどによって高い生産効率をあげ，その効用が宣伝されている。しかし日本企業がグローバル化する現在，闘争を前提とする価値観をもった異った国の人々と取引をせざるをえず，平和・協調の価値観の Creditability 取引はできなくなる。さらに日本国内の Creditability 社会の中では，細かいルールがないため過度の強者が現れると富の配分が大きく偏り，人々の不満が Creditability 社会を支えている政治的枠組自体をこわす可能性もでてきた。ここで過度の強者がでないように，意思決定者の深い洞察力と大きな道義感の必要性が強調されるようになってきた。

1. Cash, Credit, Creditability 取引

経済取引には，現金取引，信用取引のほかに，“今回は泣いてくれ”といった，一見非合理にみえる経済取引までいろいろの形態がある。日本人には，“今回は泣いてくれ”といった取引の仕方は説明すればすぐ理解してもらえるが，外国人には解りにくい。日米構造協議で問題になった建設業界の“談合”もこの延長線上にある。日本人は相手を信用すると細かいことは，決めずに取引を契約してしまうことが多い。むしろ細かい取り決めは相手を信用しないことになりはしないかと思い意識的に避けようとするところがある。

現金（Cash）取引は，1回1回の現金取引で確実に利益をうる方法である。自然条件の厳しさ，

戦乱，相手の不明さなどから，不確実性要因が大きく作用するときは，この現金取引を行わざるをえない。隊商同士が砂漠のオアシスで取引する場合，ここで商品と現金とを交換しなければ，次の砂あらしで相手がいなくなってしまう可能性があるからである。現在でも回教圏の国を旅行しバザールへ行くと，現金をみせて価格交渉するのが通例のようである。

信用（Credit）取引は，1回1回の取引ですぐ現金利益をえなくてもいい。一定期間後，決められた経済条件，たとえば品質，価格，納期，担保物件などのもとで確実に現金利益が入ってくればいいという取引方法である。自然条件，政治，諸制度，相手方が安定し，不確実性要因がほとんどない場合に行なわれる方法である。現在の資本主義体制諸国では最も一般的に通用する方法である。イスラム社会でもその信用手形の歴史は，古バビロニア時代における王室倉庫にあてた「持参人払いの倉庫証券」(Lagerscheinen au porteur）まで遡ることができると言われるが，現実には9世紀から10世紀のアッバース期に手形決算が大きく発展した。[1] 日本では南北期時代，吉野の山中に銭貨を持ち運ぶのが不便なため富貴な商人が銀目を紙に書きつけて切手と名づけ通用させたのが手形流通のはじめと言われるが，公許をえた組合札が盛んに流通するようになったのは将軍家光の寛永年間とされている。[2] その時代既に為替手形，預り手形，約束手形，蔵預り切手など多種の信用手形が流通していた。

「信頼」（Creditability）取引は，相手方との1回1回の取引で利益がでなくてもいい。信頼できる，ネットワーク化された，多角的な複数の相手方と取引し，長期的にみて全体として利益がでればいいと考える取引である。ある特定の相手方との取引だけをみるとマイナスであっても，その相手方をふくめたネットワークに属する複数の相手方との取引全体でプラスになればいい。そこではたえず相手との信頼関係の強化および信頼できる人々のネットワークの拡大が重要な目的となっている。信用取引のように確定的な経済条件ないし取引ルールを必ずしも事前に決めておかなくてもいい。日本でよくいう，“今回は泣いてくれ”，“仲間取引”，“談合”，“一見の客には売らない” などの商慣習や“カシ・カリの論理”，“そこをなんとか” の一般的関係は，この「信頼」取引の典型的な例である。自然条件，政治，諸制度，取引相手が安定していて，不確実性要因が全くないと予想されるときに使われる方法である。この「信頼」(Creditability）取引の考えは，江戸時代の平和期に儒教倫理にバックアップされて，日本の商慣習として定着し，今日まで尾をひいている。この考え方は，集団性，協調性を強調するため，日本企業の労使協調，意思決定の迅速さ，系列企業システムの効率向上，企業内組織の柔軟性などで優れた面もある。しかし「信頼」取引をとりまく枠組が大きく崩れるときや，「信頼」取引社会内に過度の強者があらわれたときには多くのデメリットが生ずる。前者の例としては，日本企業が本来的に「闘争」社会である西欧に進出するときのよう

1）佐藤圭四郎『イスラム商業史の研究―坿東西交渉史―』p. 120，同朋舎 1981
2）横井時冬『日本商業史』p. 186 原書房 1982（復刻原本・大正15年刊）

に，従来の協調を主とする日本社会の枠組からはずれる場合があげられる。後者の例としては，「信頼」取引社会の中にある企業と従業員との間に，現在の土地価格の高騰にみられるような，経済合理性からみて耐えられない程の富の配分の不平等がおきている場合があげられる。

2. 集団意識の系譜

2—1 儒教と集団意識

日本人の集団意識は原初的には，縄文，弥生時代の稲作のための灌漑作業から生れたと言われている。しかし現在の日本人の意識の中で強固に形成されているその集団意識は，平和が続いた江戸時代の儒教思想の浸透後，定着した。田に水をひくには川や池からの水路工事など大規模な灌漑工事が必要である。1人ではできない。多くの人が協力しなければならない。建設工事後も協同して利用しなければならない。また梅雨期の一時期に一せいにその広くなった水田に水を張り，田植をしなければならなかったからである。ヨーロッパのように小麦畑をつくったり，牧草地を囲い込んだりする場合，その地域全員の協力というのはそれ程必要がないのと基本的に異っている。

儒教は1つの宗教というよりは，社会学に近く，その概念は本来不明確なものである。しかし日本では江戸時代に朱子学というかたちで「社会と人生」という局面を中心に体系化され，政治を安定化するための手段として積極的に利用された。儒教のアスペクトについて，溝口は[3]，1礼制・儀法・礼観念，2哲学思想，3世界観・治世理念，4政治・経済思想，5指導層の責任理念，6学問論・教育論・修養論・道徳論，7民間倫理，8共同体倫理，9家族倫理・君臣倫理，10個人倫理に分けるが，日本の指導層の儒教の受け入れは，この家族，君臣，個人倫理だけであって，世界観，政治・経済思想，学問論などにはあまり力を入れなかったと指摘する。

本来このような多くのアスペクトをもつ儒教は，それ以前から中国にあった道教，仏教とも，その中心論点は異っていた。道教が宇宙の組成や自然と人間とのかかわり合いといった，いうなれば物理学的，自然科学的な視点をそなえていたのに，儒教にはそのような側面は少なかった。また仏教が人間の本質，輪廻思想と存在という非常に哲学的な根本問題をその中核にすえているのに対して，儒教は徳目的側面を強調していた。すなわち道教，仏教と比べれば，儒教は人間と社会の本来的あり方を根本問題としていることが特徴であった。

政治の安定を求める徳川時代の指導者層は，大きな理想主義・普偏主義によって宇宙や天下に結びつけていくような儒教を求めていたのではない。彼等が望んだのは，むしろ差しあたって，こまやかな人々の受容的立場を強調する考え方の喚起であった[4]。儒教の発展史をみると，道教と仏教の

3) 溝口雄三「中国儒教の10のアスペクト」，雑誌『思想』1990，6. 岩波書店
4) 黒住眞「徳川前期儒教の性格」，雑誌『思想』1990，6. 岩波書店

哲学的根本問題を包摂した宋学の興起と，朱子によるその集大成と哲学的完成という過程をとるが，その完成された哲学が徳川時代に日本に浸透定着した。朱子学は，道教の考えを包摂し，“天地人物生々の働きと形式を理気論によってまとめあげ，その論理を社会関係を組み込んだ天地相関（大宇宙―小宇宙）のなかにとり入れる広大なシステム[5]”をつくったことが1つの特徴であった。ただこの道教の自然科学的考え方を包摂したため，この朱子学の理気哲学の中に，天観についての大きな転換が生れてきたのを見逃してはならない。政治は上帝の意志の下にあるのではなく，自然法則＝理の貫徹の中にある。天からの一方的な意志によって社会がおさめられるのではなく，多くの人々の所有欲の調和が重要であり，これが具体的な政治・経済論の中にあらわれてくる。これが徳川時代の1つのプラグマチズムの原型となった。

政治の安定のためには，徳川時代に定着し体系化されたプラグマチックな朱子学は非常に有効であり，人々の集団意識，協調意識を高めるのに役立った。中江藤樹は[6]，自分のからだは天地からつながったものであるとし，“見るべしこの身は但に是れ父母の遺体なるのみらず，他た是れ天地的の遺体なり。又たこれ大虚的の遺体なり”，と主張する。自分はある根源的なものの分肢として考える。ただその根源的なものが氏神でもなく，東照大権現でもなく，一種の親神，人間神である。少くとも道教でいう天神ではない。この考えが身近な人々との社会の重要性を意識させていく。ジョン・ロックが[7]，資本主義社会の基礎としての所有権について，まず自分のからだは，誰が何を言おうと自分のものであり，その体の一部が働いてえた富の所有権も当然自分のものであるという論理と，「自分のからだ」という出発点は同じでも，中江藤樹の恩は，その「からだ」が先祖の人間神につながっていくところに大きな差がある。

江戸時代の日本人は，人間の社会的関係を極度に重視する。それが各人をして「家」「村」「藩」「家門」「名誉」に結びつけ，「神」という場合も家門の祖先神に対して責任をもつ程度である。西欧のように個人は絶対神である神にのみ責任をもつのではなく，「社会」という「相対神」に責任を負うことになる。倫理は形式的になり，集団に認められれば，それが正しいことになった。恥の倫理は正にこの集団意識の発露である。熊沢蕃山も[8]その「五倫の本」で朱子学における内在する五学（仁義礼智信）は徳性ではなく，人とのつながりとしての客観的社会性であり，“大道とは大同なり。俗と共に進むべし，独抜（ヒトリヌク）べからず。衆と共に行うべし，独異なるべからず”と強調する。絶対神などは大よそ考えられない。集団主義のプラグマティズムである。

この朱子学によってヤヤ歪められ集大成された相対主義的倫理感は，現在多くの識者から，特に

5）注4の論文
6）中江藤樹『全孝心法「孝経啓蒙」』，日本思想体系29，p. 182 岩波書店 1971
7）John Locke; Second Treatise on Government, 1764 (rpt. New York MacMillan 1956), in T. Donaldson & P. H. Werhane; Ethical Issues in Business-A Philosophical Approach-, p. 181 1988, Prentice Hall.
8）熊沢蕃山『蕃山集義和書』，日本思想体系 30，p. 88 岩波書店 1971

西欧的な「絶対神」「普遍主義」などの倫理観から批判されている。しかし，一方現在においてもまたその機能の有効性が論ぜられている。加藤は[9]ロナルド，ドーアの説 (Ronald Dore; Taking Japan Seriously, A Confucian Perspective on Leading Economic Issues, Standard University Press, 1987) を引用して，儒教の遺産について「性善説」と「仁政」を強調し，これが日本的労使関係の良さの原因だと説く。日本の労働者は経営者の資格を疑うよりも容認し，経営者に徹底した利己主義よりも「仁政」すなわち労働者と経営者自身をふくめた会社の「善意」を期待する。労使は戦うよりも協調に傾くだろうという。そして従来考えられていた「儒教的文化」→「勤倹」倫理→「労働の自発性」というのではなく，「儒教文化」→「性善説」→「協調的人間関係」→「自発的労働」という新しいドーアの説を強調する。さらに岸本は[10]，西欧の自由主義，競争主義が儒教圏地域で発展しなかったのは，「利潤の最大化」ではなく「危険の最小化」という集団意識の結果であるとするスコットの説 (C. Scott; The Moral Economy of Peasant; Rebellion and Subsistance in Southeast Asia, Yale University Press, 1976) を紹介する。生存ギリギリの生活の中で，不安定な天候や，政治の収奪にさらされている農民にとって，「利潤の最大化」という行動基準をとるよりも，危険の少ない伝統的農法をし，定額小作よりも分益小作を選び，いざというときは保障してくれる有力者への隷属的関係に甘んずる「危険最小化」に向うという。この考えは，儒教圏の人々が競争による経済を均衡体系とみず，放任すれば弱肉強食を通じて社会全体で崩壊に向うと考えたからであり，アダム・スミスのようには倒底考えなかったと主張する。人々の安全第一主義思考はやはり集団主義，協調主義を前提としている。

このように現在儒教圏地域の経済の発展について，色々研究されているが，その中心はプラグマティックな社会意識，人々の集団意識，協調意識であり，一般に通説として流布している「勤勉」とか「質素」とかいう「勤倹倫理」でないことはわかってきた。

2—2 西欧におけるプロテスタンティズムと資本主義精神

政治に宗教社会，武士階層が強い力をもっているときは，日本でも西欧でも経済合理性は自由に追求されなかった。土屋は[11]，マックス・ウェーバーの所説から，資本主義の区分を賤民資本主義時代(商業資本主義時代)，産業資本成立期，産業革命以降の機械生産時代の3つにわけ，はじめの商業資本主義時代には，利潤追求，資本蓄積の営みは道徳外ないし反道徳的ながら，やむにやまれずやったという。産業資本成立期以降はプロテスタントの信仰を堅持し，道義的・禁欲的で誠実・清潔な生活態度と勤労とによる利潤追求の営みを，神の御旨に合するものとし，それによる資本蓄積は神の賜物とした。ここでは利潤追求，資本蓄積は「自己目的」「最高至上目的」になってきた。土屋

9) 加藤周一「儒教再考」朝日新聞記事，1990, 7, 17.
10) 岸本美緒「モラル・エコノミー論と中国社会研究」雑誌『思想』1990, 6. 岩波書店
11) 土屋喬雄「日本経営管理史」p. 29, 日本経済新聞社 1964

は，ウェーバーが商業資本主義時代には道徳に無関心であったのが，産業資本主義成立以降「資本主義的精神」がはじめて倫理性を意識するというが，日本では賤民資本主義時代すなわち商業資本主義時代の江戸時代に，商人の精神に倫理性が明確に意識されていたという。しかし筆者は，後述するように，その時代の日本の商人の倫理性は「神にのみ責任をもつ，しかも神には頼らない」という西欧カルヴァン派のような厳しいものではなかったと考える。

この江戸時代の商人道徳と西欧のプロテスタント倫理，ピュアリタン倫理と比較して考える場合，まず日欧の商人をとり囲む条件が大きく異ることを考えなければならない。由井は[12]近世ヨーロッパの価値体系と江戸時代のそれとの比較をいくつかの視点・条件から行っている。まず都市の性格について，ヨーロッパでは商人が国王，貴族から独立し，自由・反封建の思想をもったブルジョワジーとして勃興してきたが，江戸時代の都市の大部分は城下町であり，最も栄えた商都大阪は幕府直轄であり，自由・反封建思想はおこらず，独立気概のブルジョワジーは育たなかった。一方宗教も，ヨーロッパではキリスト教は国法を越えた強い力をもち，王，貴族などの支配階級の権力の乱用に反対したのに，日本では，織田信長以来独立宗教を弾圧し，江戸時代以降は一向一揆の弾圧後，仏教は武士の支配体制強化に奉仕する存在になってしまった。またいわゆる合理的思想については，ヨーロッパはギリシャ的な普遍的な合理主義思想が発達したのに，日本では鎖国のための普遍的な原理は発達しなかった。さらに前述したように，ヨーロッパでは個人は神に対してのみ責任をもったのに対し，日本では「武士階級」「家」の考えが強く，人間の社会的関係が極度に重視され，いわゆる個人主義的発想はあらわれなかった。以上のように由井は，都市，宗教，合理主義，個人主義の4つの視点から日欧の価値観の相違の原因を明らかにしている。

しかし筆者は，江戸時代商人の道徳とヨーロッパのブルジョワジーのそれとの違いは，単に彼等をとりまく都市の性格，武士階級，宗教制度などの外的条件の違いによるだけではないと考える。[13] ヨーロッパ人のもつ宗教観，神に対する考え方が，この時代に大きく変革したからではないかと考える。日本ではこの時代，神に対する考え方に特に変化があったわけではない。ウェーバーは，われわれ人間は生きる限り無意味な生の働きにあくせくするのだから，われわれの人生は<呪れた運命>と言わざるをえない，という。そして“世界の諸事象が「非呪術化」(entzaubern) されて呪術的意味内容を失い，それがただなお「存在」し「生起」するだけでそれ以上のなにものをも「意味」しなくなるにつれ，世界と生活態度に対する要請は，これが常に1つの全体として有意義にかつ意味深く秩序づけられるべきである……という。[14] すなわちただ存在し生起するだけの生にも意味づけが必要だといって，まずこの時代に新しい宗教観変革の不可欠性を主張する。この<呪われた

12) J. ヒルシュマイヤー，由井常彦『日本の経営発展—近代化と企業経営』pp. 68～70，東洋経済新報社，1977

13) この節の論旨の多くは，石坂巌『知の定点』木鐸社，1984を参照。

14) マックスウェーバー『宗教社会学』p. 160，武藤，薗田（宗），薗田（坦）訳，創文社，1976

運命>からの出口は何か。ウェーバーによれば，1つは科学の発展であり，他は倫理的宗教運動であった。特に後者が重要であり，その宗教運動こそが<現世を実践的，倫理的に合理化>する[15]ものであった。

ウェーバーは歴史の過程，特に西欧近代の歴史を合理的過程として把え<魔術からの解放>であると主張した。呪術に頼ったり神に祈ったりする代りに<技術と予測>が大きな役割をはたし，さらにこの現世を実践的，倫理的に合理化するには<宗教倫理の努力>が主要であるという。この宗教倫理の努力のために，カルヴァンはまず絶望的な論理を提示する。その時代の多くの民衆が求めた来世の救いについて，神が既に処理決定していて自分達にはどうにもならないものだと説く。すなわち“神の決断は絶対不変であるがゆえに，その恩恵はこれを神からうけた者は喪失不可能であるとともに，これを拒絶された者にもまた獲得不可能なのだ，という[16]。“われわれは神の決意を理解することも知ることさえもできない[17]，とカルヴァンはいう。このカルヴァンの教説は，それまでの民衆の伝統的な生活感覚や感情，習慣を断ち切った。説教者，教会，聖礼典，そしてしまいには神すらも救いの手助けにならないことがわかった。それまで自分を救ってくれると信じていたものすべてが否定されてしまった。残されたものは個々人の<内的な孤独感>のみであった[18]。ここから<心的起動力>，<内面的孤独化>が民衆の中におこってきた。

この内面的孤独化の感情を現世の実践的合理化へ向わせる思想的な凝固剤が特殊な禁欲思想であった。カルヴァンは[19]まず，人間は自分の不安・疑念をとりはらうために，“誰もが自分は選ばれているのだとあくまで考えて，すべての疑惑を悪魔の誘惑として斥ける，そうしたことは無条件に義務づけることだった。自己確信のないことは信仰の不足の結果であり，したがって恩恵の働きの不足に由来するとみられるからである。”この例として，“あの資本主義の英雄時代の鋼鉄のようなピュアリタン商人のうちにみられる。”と説明する。そして救いの確信をもてとの言葉だけでは不十分であるから，そのための方法として禁欲的職業労働の必要性を強調する。“そうした自己確信を獲得するための最もすぐれた方法として，絶えまない職業労働をきびしく教えこむことだった。つまり職業労働によって，むしろ職業労働によってのみ宗教上の疑惑は追放され，救われているという確信が与えられる，というのだ[20]。かくて宗教的絶望の論理から禁欲的職業労働の必要性が引き出されてくる。ただこの客観的な職業労働もつねに，“「すべて神の栄光を増さんがために」(Omnia in majorem dei gloriam[21]という立場でなされなければならない。“こうして，人々の日常的な倫理的

15) 石坂巌；上掲書，p. 203
16) マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳，p. 154，岩波文庫 1990
17) 同上書 p. 153
18) 同上書 p. 156
19) 同上書 p. 178
20) 同上書 p. 179
21) 同上書 p. 197

実践から無計画性と無組織性がとりのぞかれ，生活態度の全体にわたって，一貫した方法が形づくられることになった。[22]" このように資本主義経済の担い手となるプロテスタントの倫理感は＜内なる心＞＜良心＞の深い内省からでてきたものだとウェーバーは強調する。

以上のようにこの時代のヨーロッパの商人は，まずカルヴァン派の"説教者も，教会も，神自身も自分達の救いの手助けにはならない，""魔術から解放されるのだ"という新しい宗教認識を持ちはじめ，内面的孤独化を身につけ，その原点から倫理的合理化，特に禁欲思想を求め，その上に禁欲的職業労働の考えを築いていったのである。これは江戸時代以降の日本の商人のように，神・仏に頼り，支配階層に頼り，他人に頼ろうとし，つねに儒教の信，義，協調を主張する考え方とは全く異る。ヨーロッパの商人は神に対してのみ責任をもつが，その神でさえ自分を救ってくれない，救ってくれるのは自分の禁欲的労働だとする。恐るべき個人主義思想である。ここからヨーロッパ商人の教会，政治，国境をこえたバイタリティと深い洞察が生まれ，近代資本主義思想の原点がつくられていった。

2—3 抽象的な朱子学の浸透による資本主義精神の未発達

江戸時代中期，日本も貨幣経済に移行していったのに，何故西欧ブルジョワジー商人の考え方，資本主義精神が発展しなかったのか。まず第1にあげられる現由は，武士階層が絶大な権力を握り，また本来人間の尊厳からそれら支配階層と対立すべき宗教集団まで御用階層化し，資本を蓄積してきた商人階層も武士階層を覆えすだけの力もなかったことがあげられる。そして平和が続くと，この支配枠組を覆えすよりも，その枠の中で自らの実質利益を実現しようとする考えが強くなる。さらにこの枠の中での合理性の追求を抽象的なかたちで唱導したのが朱子学であり，幕府がこれを積極的に普及させ，体制維持に利用したことがその理由にあげられる。

加田は[23]徳川時代を，幕府の基礎が形成され守勢的発展をとげた慶長から元禄までの100年間と，享保から徳川吉宗の天保初年までの120年間と，その後の天保から慶応までの30数年間の3時代にわけてその特質を論ずる。第1の時代は，足利末期から60～70年続いた戦乱が平定され，幕府に権力が集中した封建体制ができ，平和を喜びつつ極成期の元禄に達する。第2期は，幕藩体制の支配力は徐々に下り坂になり，徳川の体制は形式化し固定化する。国内の厳重な統制と外部に対する鎖国化が行われる。ただ享保改革，寛政改革で大きな破綻はまぬがれる。武士，農民は困窮し，町人が富と力を増してくる。第3期，天保中期より諸外国船あらわれる。蘭学盛んになる。徳川の朱子学は，新しい事態に対応できず，神道・国学勃興し，幕藩体制批判となる。政治・権力関係が不安定になる。

---

22) 同上書 p. 197
23) 加田哲二『日本社会経営思想史』p. 12，慶應通信 1962

安定的な徳川体制ができ上る前は戦乱が続いていた。そのときは，武士と主君との間は，後者が奉禄をくれるから前者が身命を奉ずる関係があったが，江戸中期になって平和になると身命を奉ずる必要もなくなったし，また奉禄も実質的価値が下る。まして戦乱がないから戦に勝って得た他国の領地を武士の働きに従って分け与えるわけにはいかない。そこで戦闘能力という武士の実質的な価値と，土地，奉禄といった経済的価値との交換ができなくなり，実質的な君臣の支配関係が難しくなってきた。そこで抽象的な君に忠，武士道などという抽象的関係を強調せざるをえなくなった。一方商人も江戸中期になり貨幣経済に移っていくと力をつけてきた。しかし士農工商の厳格な区別があり，商人は武士に支配され，武士の考え方にすり合わさざるをえなかった。商人は力をつけ武士のそねみ，ひがみをうけはじめると，利益を追求しながらも武士の儒学に益々合せざるをえなくなり，武士道が抽象化すれば自分達の倫理も抽象化せざるをえず，利とともに信義を重んぜざるをえなくなった。また商人にとっても大店になれば，朱子学，特に前出の家族倫理，君臣倫理，共同体倫理がその管理に役立つようになり，これを積極的に活用するような面もでてきた。そして大店での習慣，礼儀，作法も武士のそれと同じようなかたちになってきた。

石田梅岩[24]は，まず儒教の「仁」や「徳」や「学問」を商人道に導入しようとする。“商人の道を知らなければ，貪ることを勉めて家を亡す。商人の道を知ると，欲心を離れ，仁心を以て勉め，道に合(カナ)って栄えるのが学問の徳である”と説いている。しかし梅岩も商人道を説く以上，実質的な利がなければならないとして，まず国の経済について孔子の所説を引用して，次のように言う。“又「国を治るには，用を節にして，民を愛す」とのたまふ。財宝を用る事倹約にする中に，人を愛するの理備はれり。人を愛せんと欲すとも，財用いざれば不能(アタワズ)。しかれば家国を治るには倹約は本なること明なり。[25]”といって，為政者の経済思想，政策の根本理念を朱子学の立場から強調する。そしてさらに，“孔子，孟子といえども「禄を受けざるものは，礼に非ず」といわれている。受ける道があって受ける禄は，受けたからとて欲心とは言わぬ。”“商人ノ買（売）利ハ士の禄ニ同シ。買利ナクバ，士ノ禄ナクシテ事フルガ如シ。[26]”といい，武士も禄をもらうのが当り前のように商人も売利をうるのは当り前だと主張する。既に武士の奉禄の価値が下り，実質的な「経済取引」よりも抽象的な「滅私奉公」を強調する朱子学が幅をきかす時代に，梅岩は商人の立場から，抽象化に逃げようとする武士階級の掟を批判し，実利社会，経済社会の重要性を強調しようとする。

さらに海保青陵[27]も，朱子学の中核たる君臣倫理までも，実利，経済取引の考えで批判する。“古ヘヨリ君臣ハ市道ナリト言也。臣ヘ知行ヲヤリテ働カス，臣ハチカラヲ君ヘウリテ，米ヲトル。君

24) 石田謙『石田梅岩と「都鄙門答」』，「式学者，商人ノ学問ヲ譏ノ段」p. 165 岩波新書，1968
25) 石田梅吉『斉家論（下）』日本思想体系 42 石門心学，p. 23，岩波書店 1971
26) 石川謙；上掲書 p. 166
27) 海保青陵『稽古談巻之一』日本思想大系44 本田利明，海保青陵，p. 222 岩波書店 1970

ハ臣ヲカイ，臣ハ君ヘウリテ，ウリカイ也。ウリカイガヨキ也。ウリカイガアシキコトハナシ。凡ソウリカイノコトハ，君子ノスルコトデナイト云ハ，孔子ノ利ヲイトウコトヲ丸ノミニシテ，ノミソコナッタル也。……”と言って，痛烈に朱子学の抽象的空論に挑戦する。

江戸中期以降，武士階級の絶対的権力のもと，一応表面上政治は安定していたが，貨幣経済に移行する過程で商人も富を得，力を得てきて，自らのレゾン・デートルを主張するようになった。しかしそれはヨーロッパの商人のように＜自己の内なる光＞＜内面的孤独化＞からくるのではなく，やはり支配階層の枠の中での自己主張であり，せいぜい支配階層たる武士と同じなんだという主張にとどまらざるをえなかった。ただ武士の主張する抽象的朱子学は否定されはじめ，実質的価値を主張する萌芽があらわれてきた。

2—4　江戸時代商家の家訓と株仲間の信用

江戸時代商人は儒教の下での経済合理性を主張せざるをえないので，「利」より「義」がまず表にでてくる。武士社会の反映である。大丸の開祖である下村彦右衛門は天文元年（1736年）「先義而後利者栄」（義ヲ先ニシテ利ヲ後ニスル者ハ栄エ，利ヲ先ニシテ義ヲ後ニスル者ハ辱メラレル）という七文字を掛軸にし，全店に配布し，これを大丸の家訓とした。[28] それでは義とは何か。取引上の信頼である。価格厳守，闇取引をしてはいけないなどをあらわす。大阪の薬屋，若狭屋太郎兵衛の掟書，追記（安永2年）には「金米薬種其外何不寄不実商内堅ク仕間敷事」（不実商内とは闇取引のこと），「相場より格別下値或物は猶以取りあえ候事無用之事」[29] として，闇取引の禁止，価格厳守によって信頼をうることを求めている。また呉服商，山内兵右衛門の「慎」家訓（享保3年）も「御得意方江諸代呂物何事によらず実儀第一之事」，「惣而不実ヶ間敷事相慎可申事」[30] とし，取引先の信頼獲得を最重視している。さらにまた近江の織物業，中村治衛宗岸の家訓（宝歴4年）は，得意先重視を徹底させようとする「我家に出入する人は必ず慇懃に待遇すべし」「他国へ行商するも総て我事のみと思わず，その国一切の人を大切にし，我利を貪ること勿れ，神仏のことは常に忘れざる様致すべし」[31] と説き，「お客様は神様です」の徹底をはかっている。

一方この時代の商人はヨーロッパの商人のように自由な取引ができないため，経営の多角化ではなく，専門化・専業化の傾向を強めていった。その結果，同業者同士の仲間意識は強くなり，同業者間の「信頼」「義」がさらに重視されるようになった。江戸時代の都市の卸商問屋は，距離が遠くなるほど，取引量が大きくなるほど，排他的に単一商品を取扱い，専門化するようになった。そして専門化した商人達は結束の強い株仲間を組織し，既成の系統を無視した取引をすれば「引きが

28）宮本又次；下村彦右衛門，日本の商人「上方商人の戦略」pp. 164～205 TBS ブタニカ，1983
29）宮本又次『近代商人意識の研究—家訓及店則と日本商人道—』p. 187，有斐閣，1941
30）同上書 p. 219
31）同上書 p. 76

だり」として厳しく，排斥，糾弾された。もし大阪の問屋から仕入れることになっていた江戸の問屋がそれをさしおいて産地と直接取引すれば，大阪の問屋を経由する場合の口銭と同額をその問屋に支払わなければならなかった。[32] これは居取口銭と呼ばれた。現在のペーパー問屋の原型がすでに現れていた。その経済機能についてみれば株仲間はヨーロッパのギルトと同じ機能をはたした。株仲間は仲間内の不正な競争は禁止され，決められた流通組織以外に商品を流すこと（「抜荷」）はできず，しかも同業卸商人は同じ町内に生活する者が多かったから成員同士監視され，価格は統制されていた。また積極的な宣伝活動によって顧客を争奪することも逸脱行為とされた。またさらに諸国の荷主などに不信義があれば全員が取引停止などの処理がとられるので，取扱商品については概して高い信用がえられていた。[33] この集団責任はこの時代の1つの商慣習となっており，これが商品信用，流通の基礎にもなっていた。蔵預手形の集団責任について，横井は次のように説明する。[34]

“砂糖預り切手の定め日限とは三年三月をいふ，何組落札とあるは維新まで砂糖仲買七組に分れ其組合にて入札せしが故なり，若し代金不納其他の故障ありとも組合連名の者一同に其責を負うことにしたるが故に，手形面の妻書に何組落札と記せり，又水火盗難あれば必ず蔵所にして新砂糖と引替え渡すことゆゑいささかも懸念するものなくよく流通せしという。” と述べ，いかにその時代の集団責任をベースにした信用取引が発達していたかを説明する。

株仲間同士あるいは得意先に対しては，江戸時代の商人は自らの集団意識から徹底的に信義を重んじた。しかし武士階層に対しては集団意識からではない。武士階層は支配階級であって仲間意識，集団意識が通ずるわけではない。ここでは儒教の協調意識が働いた。権力に対して対抗するのではなく協調する。しかし商人である以上，信義だけでは経営はなりたたない。大名貸などはその貸倒れのリスクが大きいから表面的な経済合理性からみれば否定される。しかし武士階層から信頼をうること，さらに特権をうることを考えれば，長期的には十分採算にあったものと思われる。これが Creditability 取引の1つの原型となる。

大名貸の利率はそれ程高くなく，しかも支払は10～20年と延滞された。年8～10%の利率では，倒底貸付金の回収にはならなかった。それでも蔵元や掛屋がこれを行ったのは，この貸付の対価として多くの商業上の特権が与えられたからであり，また一部回船などを除いては商人にとって適切な投資対象が少かったからである。蔵元と掛屋を兼ねた場合の具体的な特権には，[35] 藩の債主としての貸付金利のほかに，1）蔵元としての米，紙その他の販売の口銭，2）掛屋としての預託された売上金融上の利益，3）蔵元掛屋として藩より許された士分待遇と扶持米・合力米などの利益を一手に得ることができたのである。1回1回の大名貸の元金回収，利子取得などは重要ではなかっ

32) J. ヒルシュマイヤー，由井由彦；上掲書 p. 28
33) 同上書 p. 41
34) 横井時冬『日本商業史，上掲書』p. 192
35) 宮本又次『大阪の研究4』p. 81，清文堂 1970

た。支配階層たる大名との「信頼」(Creditability) の増大こそが重要であり，以後益々複雑化する経済・商取引環境の変化に対処するためのベースとして，これを築き上げていくことが，才覚ある商人の経済合理性の精神の発露であったのである。

2—5　江戸時代における資本主義経済思想発生の底流

武士階層によって一定の枠をはめられた江戸時代の商人意識の中に，奉公，体面，分限のような消極的な面が発生するのはやむをえないが，一方商人としての才覚，始末，算用の積極面も，できる限り多くの局面で発揮された。西鶴も[36]“人の分限なること仕合という言葉，實は面々知慧才覚を以て稼ぎ出し，其家さかゆるぞかし。”といって，知慧・発明・かけひき・工夫等の一切の商才を奨励した。また始末はつねに強調され，“入りを計って出ずるを制し，収支の適合をはかる[37]”ことが多くの商家の家訓となった。しかし算用という合理的，積極的な面はやはり武家政治の枠で大幅に制約されざるをえなかった。ことに交換法則・等価交換の原則を武士身分に対して強制するわけにはいかなかった。大名貸などはその例である。

この政治的には武士階層によって，思想的には朱子学によってはめられた枠を，由井は[38]，江戸時代の垂直的 (vertical)，水平的 (horizontal)，時間的連続 (time-continuity) の3つの価値感にわけて表現する。垂直的な価値とは上下の序列と公私の価値である。和辻は，林羅山が[39]，不干齋ハビアンを教会堂に訪ね問答したことについて記し，“大地か円いというハビアンの論証に服せず，ハビアンが「物皆上下あるの理」を知らないと憐んでいる。といい，” さらにプリズムやレンズを示されたとき，“羅山は「奇巧の器を以て庸人を眩惑する」といって怒っている”と説明する。すなわちすでにその時代に自然科学に興味をもった日本人も相当いたのに，大学頭の羅山が儒教に対していかに狂信的に帰依し「物皆上下の理」の上下の価値観をアプリオリのものと信じていたかを説明している。このように江戸時代の垂直的価値観は，教育の最高責任者から庶民に至るまで徹底的に浸透していた。水平的価値とは集団へのコミットメントをあらわす。宗門人別帳によって，士族，庶民を問わずあらゆる世帯が寺戸籍をもったことは注目すべきことである。この制度によって，宗教が本来もつ内面的パストを失わしめ，上述のヨーロッパの<魔術の追放>のようなこともおこらず，枠への服従を認める結果になってしまった。商人自身も株仲間の構成メンバーになることによって自他ともに認められるようになり，その仲間組織においては，行動の諸規制がこまごまときめられるようになった。時間の連続性ないし伝統の価値は，武士階層と同じようにビジネスの創始者である祖先に神に準ずる地位を与え，これを崇拝することになった。西欧のキリスト教の絶対神で

36)　井原西鶴；近代日本文学大系第3巻「世間胸算用巻二，第一，銀一匁の講中」p. 709. 1927 国民図書株式会社
37)　宮本又次『近世商人意識の研究—家訓及店則と日本商人道—』p. 34 有斐閣 1941
38)　J. ヒルシュマイヤー，由井常彦；上掲書
39)　和辻哲郎『日本倫理思想史 下』p. 387 岩波書店 1952

はなく，祖先ないしビジネスの開祖が神格化・神聖化され絶対的価値をもつようになったのである。このようにして江戸時代の日本の商人の倫理観は武士階層と朱子学の大きな枠の中で垂直的，水平的，伝統的に規制され，君臣・家・集団倫理が重視され，＜世間様＞＜世のため人のため＞が強調された。

しかし一方，朱子学の枠の中でも貨弊経済の浸透とともに西欧的合理思想が徐々に芽生えはじめてきた。鈴木正三[40]（1579～1655）は，“世法，仏法二ならず，職業生活即信仰生活である。商人はその職分即ち社会的責任を自覚し，身を捨て，業務に邁進せよ，利潤の獲得に努めよ，しかし得た利潤を自己のために消費せず，業務達成に使用せよ，我身の世間的報酬栄誉を求めることなき善，「無漏善」を追求せよ”という。禁欲的職業労働を主張するプロテスタンティズムの合理性と同じである。既に江戸中期にこのような考え方がでてきている。たゞこの考えは，西欧のように個人を中心にしたものではなく，家業として子孫へ継承されていくものであって，個人の信仰からでたプロテスタンティズムとは違っていた。

幕藩体制の第3期（天保以降）になると，貨弊経済の浸透とともに経済合理性の思想は大阪を中心に盛んになってきた。＜薄口銭＞＜合理的経営＞などがはっきり主張されるようになってきた。18世紀の大阪の市場展開は，特権的・非合理的契機を未だに包蔵していたが，結局は商人相互間に共通の商品価格と一定の均等な利潤率が形成されるようになってきた。諸問屋仲間の利潤も小額の「薄口銭」に平均化される状況になってきた[41]。また彼等を中心に堅実な商法や合理的な経営努力，また資本拡大や金融制度の意欲的な活用などがおしすゝめられた。山片蟠桃は，その著『夢の代』(1820年）の中で，“今天下ニカシコキモノハ米相場ニシクハナシ，”“官ニアリテハ物ノ有無ヲハカリテ価ニカカハルベカラズ”と述べて，自由経済の重要性を説き，草間直方も，その書『三貨図彙』(1815年）において，“元来相庭ハ商賈ノ私ヨリ起リ，公道の意ニヨラズ，”“売買ヲナスコト自然ニ任カサルベシ，”といって，自由市場・自由経済を主張する。そして『三貨図彙』ではさらに，“利ヲ争フハ商賈ノ恒ナリ”，“商賈ハ只利ニハシルノミ，コレ学ナリ，”と利潤追求をはっきり標榜する。上述した江戸中期の家訓の中で強調される利より義という考えは払拭されてしまっている。この時代，武士支配の農業経済体制が不合理になってきても，商人達はその不合理の中で，商品経済，流通経済の合理性に着目し，貨幣的な合理性を追求しようとしたのである。

2—6 明治以降の経済合理化と Creditability

明治政府はそれまでの Creditability 社会の枠組をつくっていた幕藩体制をこわし，新たな経済

40) 多田顕「近代商人の経営理念—鈴木正三・井原西鶴・三井高房・石田梅岩—」杉原四郎・逆井孝仁他『日本の経済思想四百年』p. 63, 日本経済評論社 1990

41) 逆井孝仁『流通合理主義の成立と展開—草間直方・山片蟠桃・三浦梅園—杉原四郎・逆井孝仁他』同上書。p. 117

合理性を目ざす政策を次々にうちたて実行していったが，人々の無意識の価値感となっている，Creditability・集団・協調意識はそう簡単には変らなかった。幕藩体制の廃止とともに武士階級は消滅し，士農工商の別はなくなり，「五ケ条の御誓文」に短的に示されるような近代民主社会の方向は決まった。昔の武士階級に代って新しいエリート官僚制度がでてきた。しかも軍事を重視する官僚と，産業化・工業化を重視する官僚との争いは，西南の役を境にして後者の勝利に終り，新しい産業近代国家へと向った。商人階層も，幕藩体制の廃止にともなう蔵元・掛屋・札差制度の消滅，大名貸の整理，銀目（銀本位制度）の廃止などで，従来の伝統的大店の商人は大打撃をうけた。また特権をもった株仲間制度も廃止された。このような支配階層，商人階層，商慣習の変革は，近代化・工業化の枠組づくりには必要な条件であるが，先進国との技術ギャップ，資本の不足，資本主義経済についての知識不足を克服するためには十分な条件ではない。さらに人々の意識改革，知識の向上は不可欠になってくる。

福沢諭吉は，新しい工業化社会の商人は昔の商人ではなく知識・品格のある人間でなければならず，そういう優れた人物が多く産業界に進出すべきことを主張し，慶應義塾を創設した。まず「人の上に人をつくらず」の理念をかゝげ，人権の平等を主張し，人間が自身の努力によって富を手に入れるならば恥ずべきことではなく，“国を富ます方法として其手段あるに非ず，唯全国の人民が人々の私を営んで一身一家を富ますより外なし”[42]として，アダム・スミス的発想を強調し，カネや商人を蔑視する従来の風潮に反対した。さらに商人の地位を上げるための具体的な方法として，商人自身が人品を高めることだとし，“天下の商業素町人の手に在るの間は……決して世間の尊敬を致す可からず，如何となれば之を行ふ人の品格貴からざればなり”[43]として，品格ある学者流の商人の輩出を強く要望する。そして商人の品格の貴さとして信義の重要性を説く。“凡そ世の中に，商人の口約束に背くを愧ぢず，約束の精神の頓着せずして唯法律上の証拠のみに依頼せんとしたらば，一切の商売は勿ち廃止するの外ある可からず”[44]という。そして日本人商人が，口約束だけで品物を発送し，保険約定手続をしなかったのに船が沈没してしまった。ところが以前から取引のあった英国の保険会社に詳さに話をすると保険料を払ってくれたという，先進国の商人の信義の篤さの例を説明する。福沢諭吉は，西欧思想の中にある実績主義，能力主義を強調するとともに商人の品格を強調し，その教育に力を入れ，明治の産業界興隆の最大要因たる優秀な人材を産業界に送った。一方，渋沢栄一[45]も，儒教的な理念を背景にもちながらも，民主主義，株式会社主義をとなえ，近代化・工業化を推進した。すなわちその経営理念として，“1孔孟の教え，すなわち仁・義・礼・智・信の教えに従って事業経営をしなければならない。2民主主義。「官尊民卑の打破」3「合本

42）『福沢諭吉全集』第4巻 p. 163, 1970 岩波書店
43）同上全集 第11巻 p. 120
44）同上全集 第11巻 p. 213
45）土屋喬雄；上掲書，p. 17

主義」。近代資本主義の産業をおこすには株式会社組織の企業によるべきである。”と明示した。

しかしこのような制度の改廃，新しい思想的リーダーの出現によって，日本の近代化，工業化がすゝめられたが，江戸時代から浸透定着した集団性，協調性のCreditabilityの無意識の価値感はそのまゝひきつがれていった。由井[46]は，明治時代の変化は各人が自分の属する集団を自由に選択できるようになったことであると指摘すると同時に，“たゞそれは，ばらばらな個々人としてではなく，藩閥，郷党，学校，家などなんらかの水平集団ないし縁故とのかゝわりにおいてであった。”として，集団意識の存在を指摘する。事実，商人の集団意識は廃止された株仲間をなんとか存続させたいとして，それに代るものとして全国に商法会議所を次々につくっていった。さらに，民主主義をとなえる渋沢がつくった銀行や会社にも，相変らず，支配人の下に，一等，二等，三等，四等の手代ないし書記制度が設けられ，上司に対しては絶対的な敬意を払うことが要求された。これらは福沢，渋沢のかゝげる理想とは大きくかけはなれるものであり，集団性，協調性は依然として存続しつゞけたのである。

大正・昭和時代は，一部では大正デモクラシーが経験されたが，人々の集団意識はそのまゝ継承され，むしろ強化される傾向にあった。皇室は全家族の宗家，天皇を父とする「家」国家という国体観が確立され，家族主義，君臣・家族倫理は，社会のあらゆる集団に強制的に定着させられた。企業経営においても家族主義システムの成功が宣伝された。鐘紡の武藤山治[47]は，家族システムを実施し，心情的・精神的態度の必要を力説する大キャンペーンを展開した。そして作業上の心得についての諸規則を設け，温愛の情と相互の和を尊び，自己抑制を提唱した。後藤新平も，信義と愛情を要約した「信愛」という用語を使い，国鉄全員の美徳と主張した。

このように明治以降，昭和になって表面的な法律，制度は変っても，企業経営に内在する人々の儒教的な無意識の価値観，すなわち集団性，協調性，世のためひとのため，集団に対する信義などはそのまゝ受けつがれて，経済取引においても Creditability の考え方はそのまゝ受けつがれていった。

3. Creditability の功罪

集団主義，協調主義の価値観からくる，長期的な「信頼」(Creditability) による取引には，現在そのメリットとデメリットとが多くの視点から論議されている。アジアにおいては儒教で資本主義の国々の経済発展はめざましい。自動車など大規模組立産業システムではこの集団・協調性の意識は有効に働く。一方集団意識が強く，系列関係の強い日本経済はその市場を世界に開いていない。

46) J. ヒルシュマイヤー，由井；上掲書 p. 177
47) 同上書；p. 321

また日本の集団意識はいままでの経済には好都合に作用していたが，そのルールのなさは，土地問題に基因する資産分配の不平等をおこさせ，政治面に大きな打撃を与える可能性をもたらせた。このほか多くの議論がある。以下この議論とその底にある考え方を論じていこう。

3—1　協調主義の経済への貢献と国際政治への障害

儒教で資本主義体制をもち経済成長している国々として，日本，韓国，台湾，香港などがあげられる。フィリッピンは資本主義でもカソリック，インドネシアは資本主義でも回教，中国は儒教だけれども共産主義であり，あまり経済成長はしていない。何故儒教で資本主義の国の経済は成長するのか。これまで述べてきたように儒教圏の人々は集団意識が強い。また資本主義社会では自由・競争が要求される。資本主義体制の欧米諸国では，キリスト教を中心に内面的良心，個人意識が強いため，個人主義的競争がはげしい。ところが現在の技術革新の下では，個人競争より集団同士の競争の方が効率がいい。たとえば町医者はいままでは聴診器と注射器があれば立派に医療業務を行いえた。そしてよい診断ができれば見たてのいい名医として，はやった。しかし現在の技術革新は数多くの高価な大規模診断装置を開発した。たとえばＣＴなどは数億円もする。こういう高価なハイテク設備は町医者では買えない。大きな病院しか備えつけられない。いきおい病人はそのようなハイテク設備のある大きな病院へ行くことになる。大きな病院は多くのスタッフをかゝえ１つの組織集団として機能している。１人の名人芸の医者より，集団で協調しながら医療を行える人々の方が効率がいい。すなわちハイテク社会では個人間の競争よりも，集団間の競争に優れた方が効率がいい。大型コンピュータを中心にした通信技術革新が多くの人々を１つのシステムに結びつけるため，この集団競争をますます強めている。これが現在，儒教で資本主義の国の経済が伸びている大きな原因である。

また日本の自動車製造企業，半導体製造企業の成功の原因が集団主義，協調主義によって多く説明されている。半導体の開発は400工程もの違った技術を一糸乱れず協調しながらやる集団的活動である。終身雇用による安心感や集団意識がこれを可能にするといわれている。しかしこれらの成功はこのような技術面からみた整合性だけによるものではない。米国の経営者に言わせると，トヨタの just in time のカンバン方式は米国人でもまねられる。まねられないのは各部門の協調であるという。そして次の例を話す。ある工場で自動車のドアがどうしてもうまく取り付かない。いろいろ調べてみると，ドアのパッキングの成型やパッキング取付け金具などいろいろの原因が複合されてうまくいかないことがわかった。なかでもゴムのパッキングを検査し購入した購買部門担当者の責任が重いように思われた。米国ならば，ドア部門の人間も，パッキング部門の人間も，購買部門の人間も，自分の責任ではないと主張し，真の責任者は誰かと徹底的に議論し追及する。最終的には最も責任のある個人を呼んで責任を追求する。日本では大体原因がわかれば，ドア，パッキ

ング，金具係，購買係，全体を呼んで，これからもう少し気をつけてくれと言って，個人の責任まで追求しない。本人も自分のミスがわかるから，次のときから気をつけ，そのような失敗をおこさない。何故個人責任まで明確にしないのか。日本のある工場長は，工場側ではパッキング購買部が悪く，工場の方に落度がないことがわかっていても，もしこれを徹底的に明らかにすると，将来自分が工場長から購買部長に配置転換になったとき，部下から総スカンをくうことがわかっているからだ，と説明する。技術的な整合性の問題を，長期的な人間的な信頼関係の視点からみなおしている。個人の責任の追及，あからさまな非難・批判・議論・争いはなるべく避けていこうという考え方である。激しい争いをして，その後仲直りをして，長期の信頼関係をつくるというやり方は日本人は苦手のようである。

トインビー[48]は，人と人とが出会うとき，一方が相手に戦いを挑み，他方がそれに応戦する。人間は異文明，異民族，周囲の自然環境からたえず挑戦をうけており，これにどのように応戦するかによって，歴史が形づくられていく，という。欧米人は日本人と違って，人生を調和においてではなく戦いにおいてとらえようとする。そのあとで調和する方法を身につけているようである。石坂[49]も，ウェーバーの所説を引用しながら欧米人の争いの価値感を力説する。“ウェーバーの古代史研究によると，ギリシャの都市国家は絶えず戦争を行い，永続的な平和を結ぶことが罪悪視された。さらにウェーバーによると，なにか理想や理念の現実化のためにわれわれが暴力の行使にでた場合，結果するのは理想の実現であるより，次の暴力行使を呼び起すことでしかない，と言い，永遠の争いこそが人生の根本事実だという。

平和な江戸時代に導入された儒教の協調倫理になじんだ日本人には何んとも理解しえない価値観である。この集団主義，協調主義は経営の発展に寄与したことはたしかであるが，政治的な面，特に異民族に対する政治面に現在大きな不満を生じさせている。他民族と戦争をし辱めてから，仲直りする方法を知らない。この仲直りは根元的な道徳の問題である。ここでいう道徳というのは儒教のいう静態的，徳目的道徳論ではなく，ある状況の下で，自己の長期的な利益は何かを深く洞察し，道義的な周りの要請とのかかわりをギリギリまで考えて，自らの行為を選択するような，動態的な道徳論である。このような根元的で現実的な仲直りの道徳論が日本人にはわからない。

現在，戦争中の韓国人労働者の強制連行，植民地時代の日本人の暴虐行為，日中戦争時の日本軍の残虐行為，東南アジア諸国民への侮辱行為などが次々に新聞，マスコミに報道され，韓国の盧大統領来日の際には，天皇及び首相が正式にその時代の無暴な行為を謝罪せざるをえなくなった。日本の一部国会議員などはこれだけ謝ればいいじゃないか。これ以上の謝罪を要求するのは逆に相手が悪いといった論調もでてきている。なぐった人間は忘れるが，なぐられた人間は忘れないという

48) トインビー・若泉敬『トインビーとの対話，未来を生きる』pp. 262〜272 毎日新聞社 1971
49) 石坂巌；上掲書 p. 181

単純な論理もわからない。暴力行為が現実におさまれば協調が生ずるのだ，暴力行為がなければ平和が続いているのだという。人生は平和，協調が常態であって，争い，暴力は異常なのだと，日本人はどうしても考えてしまう。だから一時的な異常について謝ればそれでいいと思う。しかし相手は，その争いとか，日本人が異常だと思っているものが常態だと考えている。だから一時的な謝罪でなく，その争いの中に生きていく道義，その中でお互いにギリギリの譲歩と利益とを求めていく。協調主義，集団主義を生活の基調にする日本は，一定の枠すなわち一定の安定した国際政治の枠の中では，ハイテク経済をうまくやっている。しかしこの国際政治が，道義的，価値観から崩れ，争いが常態になったとき，その中で経済活動だけをうまくやっていけるか大いに疑問である。

3—2 ルールのない Creditability の危険性

人々の間に長期の「信頼」(Creditability) ができると，仕事の面でも，人間関係の面でも柔軟性ができ，その集団，その社会は環境変化に対する適応力を増大する。多くの場合，細かい規則をきめなくても，お互いに譲り合い，ある程度ムリをしても，協調性を保ち，全体として整合性をつけていく。建設業界などでいう“今回は泣いてくれ”というのはその典型的な例である。今回は価格，納期面でムリを頼むが，この次の機会にはその埋合せをするという意味である。いわゆる“談合”もそうである。公正取引委員会，米国との構造協議でいつも問題になるが，この習慣はなかなかなくならない。今回落札できなかった者に，落札者が他の仕事をまわす，一部の利益をまわす，などの方法で，埋合せをする。スコット[50]のいう「危険最小化」の原理である。不安定な政治・経済環境の下では「定額小作」よりも「分益小作」を選び，いざというときに有力者に保障してもらおうという行動原理である。この建設業界を中心にした Creditability 取引は，ゼネコン（大規模建設業者）から下請，孫請，孫々請とつながっている。多くの専門職種の人手を要する建設業では，これはたしかに経済的にみれば合理的な方法だと考えられる。細かくわかれた専門職種の人々が不安定な環境の下で受注生産をしていくには，このような仲間同士の保障のある信頼関係が不可欠である。こゝには由井のいう垂直的，水平的価値が明らかに存在する。日米構造協議で大きく問題にされながらも，アメリカの建設業者は関西空港プロジェクトなど大型プロジェクトの設計部分だけを受注したが，実際の施工部分には関心を示さなかった。これはアメリカの建設業者は，日本の現在の商慣習を利用できないし，それ以上の合理的なシステムを提示できないことを知っているからである。

一方，トヨタのカンバン方式，イトーヨーカ堂のジャスト・イン・タイム方式も，生産効率を画期的に改善した。トヨタの下請はトヨタの組立工場ラインに必要なとき必要な量の部品をとどけ，トヨタは在庫をもたなくてすみ合理化できる。またトヨタの下請自身もその下の孫下請にその方法

50) 前出の S. Scott の The Moral Economy of Peasant,（注11）参照。

を要求する。そうすることによってトヨタ系列全体で生産の合理化が行われる。イトーヨーカ堂はPOS方式の導入と同時に，顧客に毎食事時に新鮮な生鮮食料品を提供するため1日に3～4回魚岸の問屋から納入させる。アパレルメーカー，アパレル問屋に対しては，一定の納品期間及び納品率を指定し，それができないメーカー，問屋を取引からはずしてしまうという。このイトーヨーカ堂の方式は生鮮食料品問屋，アパレル問屋の流通革新をもたらした。コンピュータの導入による物流システムの改善をもたらした。しかしその過度の要求は生鮮食料品問屋に1日数回の小刻みの納入を強いることになり，機械化できない局面では，人手不足の現在，過度の負担をかけることになり不満が続出している。トヨタのカンバン方式も，下請の人手不足のため，下請ばかりでなくトヨタ自身も在庫をある程度置いておきロボットで自動的に出庫する機械システムをつくらざるをえなくなってきた。

「信頼」(Creditability) による経済取引は，細かいルールを決めないため柔軟性に富んでいるが，そのルールを決めないことが，取引社会の中の弱い者に合理化のシワよせがくる可能性が大きい。強い者が得をして弱い者が大きく損をする可能性が大きい。江戸時代の大名貸でも大手の蔵屋・掛屋は，間接的な他の特権を得て全体として利益をあげたというが，小規模商人はそううまくいかなかったと思われる。また Creditability 取引に大まかなルールができたとしても，ルールをつくるとき強い者が自分に都合よくつくる可能性がある。トヨタのカンバン方式，イトーヨーカ堂の納入方式，三越の売上仕入れなどの方式は，Creditability 取引であるが，やはり強い企業が得をするようにできたルールである。従って，Creditability 取引は，その適度な適用は経済合理性にプラスに貢献するが，過度の適用は経済合理性にマイナスに貢献する。経済活性化というより人々に不満をおこさせ，経済を支える政治の枠組にひずをつくる可能性がある。

それではこの適度と過度とはどのように区別するのか。三戸[51]は，バーナードの所説 (Chester I. Barnard ; The Functions of Executive, 1938) から<全人仮説>をたて，“選択力をもって決断する人格的存在としての人間は自由意思をもった存在であり，科学の対象となりながらも最後は科学をこえる存在であり，科学の手の届かぬ存在である。そしてまた人間は個人であると同時に集団的存在である。”と主張する。そして人間が意思決定するときは，サイモンのいう価値前提が事実前提に優先することを強調する。すなわち意思決定は環境条件に対応しその変化に適応していくという機会主義の側面と，他方，人間が態度・価値・理想・希望をもって環境に積極的にたち向い，目的をたて，環境を変革するという道徳的面 (moral aspect) の2つがあり，後者が前者に優先すると主張する。この三戸の考えから，筆者は<適度>と<過度>を以下のように考える。人間が上述した動態的道徳をもち，環境に対して，個人あるいは個人の属する小さな集団の長期的利益を深く洞察し，同時にまわりの道義的要請を深く考えてギリギリの決定をするのが<適度>な適用であ

51) 三戸公「バーナード＝サイモン批判」『立教経済学研究』第40巻4号 (1987. 3)

る。個人あるいは小集団の短期的利益を重視したり，長期的に考えても，まわりの道義的要請をあまり考えなかったりして決定するのが<過度>の適用である。

現在，この Creditability 取引の日本社会に与えた最大のダメージは土地問題である。企業の利潤の源泉は全企業構成員の創造性の発揮にある。企業の長期の維持発展は，トップから一般従業員までが新しいことに挑戦意欲をもやし創造性を発揮し，それが利潤となり蓄積されることによって促進される。日本の企業経営の特質の1つとして従業員の企業に対するロイヤリティの高さがあげられ，これが人々のやる気，創造性発揮のベースになっている。何故ロイヤリティが高いのか。これは一流大学を出て一流会社に就職し，まじめに定年まで働けば，会社が一生なんとか面倒をみてくれるという暗黙裡の期待が大卒従業員にあったからである。明確な取りきめ，ルールはなくても，会社は一応終身雇用制をとり，Creditability 取引が従業員と会社との間に存在したからである。現在も一流大学卒の若いサラリーマンは，特に商社，銀行などの従業員は朝9時から夜10時過ぎまで働くのを奇異と思っていない。毎日残業で家庭は寝に帰るだけ，夏休みもとらず，必死になって働いている。ところが数年前からの土地価格の暴騰は，これらサラリーマンに50km圏内の一戸建住宅をもつことを全く不可能にしている。筆者なども大学近くの土地は全退職金を出しても，一坪も買えない状態である。人間が一生働いて自分の住む家ももてないというのは正に異常事態と言わざるをえない。サラリーマンはこれを知りながら黙々と働いている。一方，会社は借金をしても節税のために次々に土地を買う。土地の価格はますます上り，会社はいわゆる含み資産増大でますます経済力を増大させている。この会社と会社構成員との間の Creditability 関係は，前者が圧倒的に力が強くなったため，意味がなくなってしまっている。日本のサラリーマン，特に大企業の一流大学卒のエリート男性サラリーマンは，労働を会社に売っているのではなく，江戸時代の滅死奉公と同じで全身全霊を会社に売っているのである。合理的な経済取引とは倒底考えられない。この小論の前段で縷々と説明した，武士階層の枠の中でできた江戸時代の君臣倫理のまゝ生きている。これは経済的にいって全く不合理である。これが今日まで続いていることが筆者には不思議でならない。

2年前から起きた社会主義体制の崩壊過程をみて，資本主義体制の勝利を言う論者もいる。しかし現在の日本に関する限りこの資本主義体制はこのまゝ維持発展されうるのであろうか。企業の利潤の源泉が企業構成員の創造性の発揮にあるのに，結果である富の配分は明らかに偏りすぎている。また土地資産をもつ者ともたない者との間の富の配分もますます偏りが増大している。人々がこのあまりの不合理性を意識し行動しはじめたら，資本主義体制を支える政治の枠組が崩れる可能性がある。いままで土地価格の徐々なる上昇は，企業に担保力をつける，個人の資産をふやすことで経済に貢献し，またそういうことによって企業も小資産家も自民党を応援するという，経済と政治とが相互に補完作用をして，日本の資本主義経済を発展させてきた。しかし今回の土地価格の暴騰は

この政治の枠をこわす可能性をもっている。

資本主義社会はアダム・スミスの見えざる神の手で価格を通じて調整が行われると信じられてきたが，実は競争に勝つためには，本質的にはたえず「差」をつくらざるをえない社会なのである。技術革新も市場開拓もいわゆるグローバリゼイションも，つねに他と「差」をつけるために必要なのである。その意味において，前述のように欧米社会は闘争過程をつねに常態としており，資本主義社会に適応した考え方をもっている。ところが日本社会は協調，平和を常態とし，Creditability 意識に安住している。その意識にすっぽり浸っているうちに Creditability 関係の一部に過度の強者が現れ，この「差」を積極的につくり，なりふりかまわず富の配分の不分理性を急拡大させている。しかし Creditability 社会ではどのようにしてこの土地高騰をおさえていいのかのルールがなかなか決められない。もともとこの Creditability 社会は細かいルールがないことが特徴なのであるからムリもない。だから一部強者が自己主張をすると，とゞまるところがなくなってしまう。

このように現在 Creditability 取引について，系列化されたハイテク組立産業の協調性による高い生産効率，ルールが決められていないための柔軟性，消費者重視の生鮮食品の1日3回の納入による流通革新など，そのメリットが強調されている。一方その反面，日本企業が世界企業として発展し価値観の異った世界に出ていくとき，この Creditability の枠が崩れてしまい，その対処方法が見出せない，またこの Creditability 社会の中に過度の強者があらわれると弱者にとっては忍耐しえないほど経済合理性がくずれてしまう，など多くのデメリットも抱えている。前者のグローバリゼイションにおける不適応も，後者の企業と企業構成員との間の極端な不公平な富の分配も，それを克服していくには意思決定者の高い道徳観が必要である。すなわち自己の長期な利益を深く洞察すると同時に，まわりの道義的要請を深く考えギリギリのところで決定していく道徳観，品性が不可欠になる。この品性がないと道義的な周囲の要請を理解できない。品性とは自制心であり，何かをすることではなく何かをしないことによって測られる。八百半の和田一夫会長は，「万教帰一」の経営理念を掲げて自らを謙虚に抑え，異なった宗教を大切にすることをすすめ，キヤノンの賀来龍三郎会長も「世界人類共生」の経営理念をかかげ，異なった価値観，生き方の重要性をとく。

4. 要約と結論

「信頼」(Creditability) 取引とは，相手方との1回1回の取引で利益がなくてもいい。信頼できる，ネットワーク化された，多角的な相手方と取引し，長期的，全体的にみて利益がでればいゝと考える取引方法である。1回1回の取引で確実に利益をあげる Cash 取引，時間に遅れがあっても確実に利益をあげる Credit 取引とは異る。日本の“今回は泣いてくれ”“談合”といった商慣習や，“カシ・カリの論理”“そこをなんとか”という一般的慣習が Creditability 取引の典型的な

例である。これらは日本人の集団意識から生じたものであり，この取引形態は日本独特のものであり，従来の経済成長に大きく貢献してきた。しかし企業のグローバル化過程で異国人に理解されず，また国内でそのルールの不明確さが富の極端な配分を招くなど現在多くの問題の発生の原因となりはじめている。

日本人の集団意識は原初的には，日本の稲作の共同作業から生れたとされている。しかしそれが日本人の意識として定着したのは，平和が続いた江戸時代の儒教思想の浸透以降である。儒教の教理は幅広く，政治安定化のための教理が多い。特に江戸時代に日本に定着した朱子学は，それ以前から中国にあった道教，仏教などの考えを統合し，特に家族・君臣・個人・共同体倫理を強調した。これは主として「社会と人生」との関係を論じ，そのプラグマチックな倫理観は武士階層の支配する政治安定に寄与した。この儒教の遺産は，現在の企業内あるいは企業系列内における集団意識，協調意識にまでつながっている。ただこの儒教の考え方は，よく言われている日本人の「勤勉」とか「勤労倫理」の原因ではないようである。「協調倫理」が結果として勤労意識を高めているようである。

江戸時代の商人の価値観は，この時代のヨーロッパの商人のもつプロテスタンティズムの価値観とは大きく異っていた。ヨーロッパでは商人が国王，貴族から独立し，自由・反封建の思想をもったのに対し，江戸時代の商業は主に城下町に発達し，そのような思想はもちえなかった。特に宗教との関係が商人の価値観を著しく異ったものにした。この時代ヨーロッパでは宗教改革がおこり，魔術から解放されるには，説教者，教会，聖礼典，そしてしまいには神すらも救いの手助けにならない，というカルヴァン派の教説がおこり，＜内面的孤独化＞の意識が進んだ。この内面的孤独化の感情を現世の実践的な倫理的合理化へ向わせる思想が禁欲的な職業労働の考え方であり，これがヨーロッパ商人，ブルジョワジーの，教会，政治，国境をこえたバイタリティになっていった。このような宗教観の発生はヨーロッパにおける戦争，闘争の歴史，闘争の価値観に基因する。ウェーバーもトインビーも，人間は異文化と出会うときは必ず戦いを挑み，暴力行使から結果するものは理想の実現であるよりも次の暴力行使を呼びおこすものだという，闘争の価値観を強調する。この闘争の価値観から人間の内面的孤独化が生れ，人間は神にのみ責任を負うが神は頼れるものではないという，個人主義的意識を高めていった。これは江戸時代の日本の商人のように，神，仏に頼り，支配階級に頼り，他人に頼ろうとし，つねに儒教の信，義，協調を主張する考え方とは全く異るものであった。

江戸時代に追求された経済合理性は一定の枠内での合理性であった。戦乱の続いた江戸時代以前は，武士と君主との間は，武士の戦闘能力と土地，奉禄といった経済価値とが実質的に交換されていた。平和が続いた江戸時代には，そのような実質的価値交換による支配関係が難しくなり，抽象的な，君に忠，武士道などが強調されざるをえなかった。これをバックアップしたのが儒教，特に

朱子学であった。一方商人も貨幣経済への移行によって力をつけてきたが，士農工商の厳格な区別により，武士に強く支配され，武士の考え方にすり合せざるをえなくなり，武士の倫理が抽象的になれば自分達の倫理もまた抽象化せざるをえなくなった。利とともに信義を，あるいは利よりも信義を重んぜざるをえなくなった。これが多くの江戸時代の大店の家訓，株仲間の掟，石門心学などになっていった。さらにこれが利益はないが特権をえられる大名貸にまで発展していった。

明治以降芽生えてきた個人主義意識も職業選択の自由にあらわれたが，やはり同藩，同郷，家などとのつながりのある職業選択になってしまい，また一たん集団を選択すればその集団内の集団意識，掟に従わざるをえなかった。福沢諭吉は商人の地位の向上，品格の向上を強く訴えたが，現実の企業経営はその後も家族主義，信義，愛情などの儒教倫理が支配しつゞけ，大正・昭和になってはかえってその傾向が強化され，第二次大戦後も集団性，協調性，世のため人のためは受けつがれ，Creditability の考えは，現在も強く尾をひいている。

現在，集団主義，協調主義の価値観からくる長期的な「信頼」取引には，そのメリットとデメリットが多くの視点から論ぜられている。アジアにおいて儒教で資本主義体制の国々の経済発展はめざましい。通信技術革新によって，大組織間の競争がはげしくなったため，個人主義思想をもつ欧米の企業よりも，儒教の集団主義思想をもった資本主義国の企業のほうが集団競争がうまく，そのため経済発展が著しい，と説明されている。また自動車，半導体など大規模の組立工程をもつ企業，あるいはその系列化を行っている企業群は，集団意識，協調意識が強く生産効率が高いと言われている。協調意識による労使協調制もその大きな原因だと指摘されている。一方集団意識が強く系列関係の強い日本の経済市場は世界に開放されていないと，日米構造協議でも大きく非難されている。また戦争中，植民地時代の日本人のアジアにおける暴虐行為について謝罪，陪償が大きく問題となっている。日本人は謝ったからいいだろうというが暴虐をうけた方はそう簡単にはおさまらない。Creditability 社会に育った日本人はつねに平和の中での協調はうまいが，喧嘩をしたあとのおさめる方法を知らない。さらに Creditability 社会には細かなルールがないため，その社会の中に過度の強者があらわれるとこれを規制する方法がなく，富の極端な配分，不公平を生じかねない。土地問題はその好例である。

この平和の枠組みの中でしか機能しない Creditability 取引の考え方だけをそのまゝもっていっても，グローバル化する日本企業は，争いを常態と考える価値観の人々，国々とはうまく交じ合えないであろう。日本企業が今後長期に維持発展するにはグローバル化せざるをえず，そのためにはいままでなれ親んでいた Creditability の価値観を修正する必要がある。またルールのない Creditability 社会が，あまりに企業中心に不平等を生ぜしめているならば，この Creditability 価値観を修正し，ルールをつくらなければならない。この価値観の修正には，何よりもまず経営者が品性をもつ必要がある。品性とは自己抑制である。自らの長期な利益を深く洞察し，まわりの道義

的要請を深く考えて，ギリギリの意思決定をするためには，自己を抑える品性，道義感がまず必要なのである。